

七・五・三（紐解祝）

産土の神に子供の健やかな成長を祈る

多忙な秋の収穫を終えて、まだ冬仕事にはやや間のある十一月、町内の各地では、七・五・三の「お宮参り」が行われます。この地方では、昔から子供が数え年七歳になると、親元・仲人・親類をよんで、産土（うぶすな）の社に参拝、その健やかな成長を祈る風習がありました。これは俗に「ヒモトキ」（紐解き）と呼ばれる行事ですが、人の一生にまつわる様々なお祝いごと（人生儀礼）は、人と人との温かい関係を育んできました。

江戸時代、子供の成長を祝う行事として、三歳時の帯結びや髪置（かみおき）、五歳時の袴着（はかまぎ）、七歳時の帯解（おびとき）や親子入りなどの儀式がありました。さらに、三歳（男女）・五歳（男）・七歳（女）の子

供が神社に参拝して、無事な成長と健康を祈る風習があり、現在、その名残りが「七・五・三」としてお祝いされています。

「七つ団子」と「呼び餅」

私どもが幼かった昭和初期までは、総領（長子）一人のみを親類・近所の人々を招いて祝い、あとの子供たちはお宮参りだけで済ませる家庭が多かったように記憶しています。

この「紐解祝」は、旧暦十一月十五日に催され、お祝いのある家々では、ウルチ米の餅で紅白の「ナナツタンゴ」（七つ団子）を作り、これを七日（なのか）に配り招待して回りました。この「七つ団子」は、「七八団子」とも呼

ばれますが、これは七・五・三の五と三を和して「八」とし、末広の祝い数で将来への大きな発展を祈ったものでした。また、親元を招くにあたって、「ヨビモチ」（呼び餅）という風習がありました。これは大きな平箆に祝いの餅を盛り、その中央に緑の杉葉を立てて、飾り縄で美しく編みあげられました。届けられた親元では、これを近隣や縁者に配り、外孫の健やかな成長



晴れ着姿もりりしい主人公

を祝いました。

「ヨリマゴ」の習慣

さて、お祝いの当日は、朝のうちにお宮参りを済ませましたが、その帰途、特定の親類・縁者の家に寄って「赤飯」を配るのが恒例でした。これ

た。このとき、呼び餅を頂いた家々では、お祝いを届けるのが慣例でした。これらの懐かしい風習も、すでに減ってしまったところも多く、現在では商業主義のために華美に流れ、本来の人生儀礼としての意味を失いつつあります。紐解きだけでなく、すべての民俗的行事にわたり、いま再びその意味を問い返す時期ではないかと考えています。

（文化財審議委員・

伊東達雄）

相談室	相談日(場所)	
健康相談	14日(大総会館)	28日(文化会館)
教育相談	毎週(月・火・金)	中央公民館
心配ごと相談 行政	毎週火曜日	中央公民館
人権相談	毎月第1・2・3火曜日	中央公民館

相談室 11月